

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009～2010

課題番号：21820050

研究課題名（和文）後期ビザンティン（13～15世紀）におけるエレウサ型聖母子の受容

研究課題名（英文）“The acceptance of the Virgin Eleousa in Late Byzantine Period (13-15th Century)”

研究代表者

菅原 裕文 (SUGAWARA HIROFUMI)

早稲田大学・文学学術院・助手

研究者番号：40537875

研究成果の概要（和文）：本研究は、聖堂における「場」の機能という観点から、同時代のビザンティン人がエレウサ型聖母子像をどのように理解・利用したのかという問題の解明を目指した。本研究を通じて、エレウサが後期ビザンティン期（13～15世紀）には葬送の文脈においても理解されるインティメイトな図像として、私的信仰の領域に導入されたことが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This research aimed to explain how contemporary Byzantines understood and used the image of Virgin Eleousa by observing the function of “topos” in churches. As a result, the researcher discovered that during the late Byzantine period (13 through 15th century) the image was introduced into the realm of private faith as an intimate image that can also be understood in the funereal context.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,080,000	324,000	1,404,000
2010年度	970,000	291,000	1,261,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,050,000	615,000	2,665,000

研究分野：西洋美術史

科研費の分科・細目：美学・美術史（2806）

キーワード：キリスト教美術史、キリスト教図像学、ビザンティン美術史、聖母子像、エレウサ型聖母子像、感情表現、葬送美術

1. 研究開始当初の背景

ビザンティンの聖母子像で最も人間的な表情を見せるエレウサ（頬を寄せ合う聖母子像）は、キリスト教美術に感情表現の地平を拓いただけでなく、西欧中世の美術にも継承され、ダ・ヴィンチやラファエロらの優美な聖母子像にも影響を与えた重要な図像とされる。しかし、こ

れまではルネサンスの独自性のみが強調され、ビザンティンに遡って議論されてこなかった。

他方、ビザンティン美術史の領域でも、作例の少なさゆえ、エレウサの実像は未だに解明されていない。世界的に見たエレウサ研究の進捗状況は、中期ビザンティン（9～12C）の「名作」ですら感情表

現の創出という文脈で引用されるにすぎず、後期の作例に至っては「凡作・小品」と黙過され、依然としてイコンの個別報告が散見される程度に留まっていた。

本研究のように「図像の受容」を考える際は図像史料と文字史料の対照が定石となるが、ビザンティンでは人為的な破壊や経年劣化により多くの作品が消失したのに加え、具体的なイコノグラフィに言及する文字史料はなきに等しい。アンドレ・グラバール以来、聖母子像に伴う添名がその同時代的な理解のあり方を示す唯一の根拠とされてきたが、この方法は図像自体が内包する意味や図像の置かれた環境を看過していると言わざるをえない。

2. 研究の目的

本研究では、図像の配された「場」の機能に着目し、後期ビザンティンでエレウサが民衆にどのように理解され、用いられたかを解明することを目的とした。

3. 研究の方法

本研究は作品が配された支持体の機能から同時代の図像理解を導くことを大きな特色とする。先のグラバールらの拘泥した添名と異なり、支持体が作品成立の必要条件にして実用に附されたモノであることに着目した結果、作品が残存する限り、当時の使用状況と民衆の視線を再現するという独創的な形で、心性も含む同時代の図像理解の核心にまで接近することが可能になった。申請者の方法は、図像・文字ともに決定的に不足する史料状況を補うだけでなく、史料不足ゆえに未開拓だった受容研究の領野を拓くことになるだろう。

4. 研究成果

本研究を通じて、エレウサが葬送の文脈においても理解されうるインティメイトな図像として、私的信仰の領域に導入された

ことが明らかになった。

(1) 中期ビザンティンから後期ビザンティンへの移行期におけるエレウサ型聖母子像の受容研究

本研究を進める前提として「ブラケルネ修道院のマリア」の添名をもつエレウサ・イコンを主題とし、中期ビザンティンにおけるエレウサの受容に関する集大成を行った。この研究により、12Cには、エレウサの頬を寄せて幼子を慈しむ抱擁が、人類救済に尽力するマリアに相応しい形と認知されるに至ったことが明らかになった。

その様子は、キプロス、アギオス・ネオフィトス修道院に描かれたエレウサ・イコンを持つ小ステファノス像から窺える。

この聖人は母がブラケルネ修道院の聖母子像に祈って身籠もった奇跡譚で知られ、イコノクラスム期に聖像擁護を貫いて殉教した。それゆえ、聖人の持つエレウサ・イコンは彼の誕生と死への自己言及と解される。

しかし、この聖人の生涯を記した『小ステファノス伝』(8C)では、件の聖母子像の類型に言及していない。さらに、後代の文字史料やブラケルニティッサ銘の聖母子像を見ても、ブラケルネ修道院にエレウサが安置されていたのは疑わしく、数ある聖母子像からエレウサが選ばれる必然性はない。この矛盾に同時代人がエレウサに寄せた期待が垣間見える。

本研究は論集『聖地と聖人の東西—起源はいかに語られるか』(勉誠出版、刊行中)に掲載されることをこの場で付言しておきたい。

(2) 聖母子像にともなう天使図像の展開とエレウサ型配置の変遷

中期ビザンティン(9~12世紀)から後期

に至る聖母子像にともなう天使図像 150 例を収集し、これまで等閑視されてきた天使の図像が聖母子像の含意する教義を強調する役割を果たしていることを明らかにした。持物により 7 種に分類した天使 125 点を年代毎に集計すると「初期：笏杖を持つ天使の優位→中期：天使図像の多様化→後期：外衣で手を覆う天使の優位」という推移が見られた。

中期に出現し、後期には優位を占める外衣で手を覆う天使に着目して、この姿勢がローマ期より下賜品の拝受を表すこと、幼子キリストが将来の受難を予告された神殿奉献の場面における祭司シメオンにもこの姿勢が適用されていること、さらに磔刑図や聖母就寝図で死者を受け取る天使にも適用されたことを指摘した上で、聖母子像に添えられた手を覆う天使は、後に贖罪のため犠牲となる幼子キリストを拝受するとの解釈を提示した。本研究は、①空間充填モチーフとして等閑視されてきた天使を聖母子像と受難の関わりを示す指標として再評価し、②聖母子像と受難の関連を判定する際、まま見られた「悲しげな表情」という主観的な基準を是正したこと、③さらに天使図像を収集・分析する過程で中期には典例上重要な位置に配されていたエレウサが後期にはその場を他の図像に譲ることが明らかになった。

3) コーラ修道院葬送礼拝堂の図像プログラムにおけるエレウサの役割

この聖堂装飾におけるエレウサ型聖母子像の配置の変化の問題をイスタンブールのコーラ修道院の作例に則して検討した。中期ビザンティンのカッパドキアにおいて、エレウサ型は聖体の秘蹟と不可分な北小祭室に配されていたのに対し、後期には主要

壁面から排され、コーラの作例のように葬送礼拝堂やナルテクス等、副次的空間に移されるようになる。これらの空間には、死への畏れを表す「最後の審判」と死の克服を表す「冥府降下」を置くのがビザンティンの定型であるが、こうした図像のトポスと装飾プログラムから、後期には同時代人がエレウサ型に死後の安寧への期待を託したと考えることができる。本研究より、後期ビザンティンではエレウサ型の感情表現が民衆の心理に近い、親近感を与えるモチーフとして理解されていたということが明らかになった。

本研究はこれまでの研究成果を継続発展させるべく後期のエレウサに焦点を定めてきたが、世界に先駆けて同類型の通時的な研究が完成するという意義を有する。さらにエレウサを軸にビザンティン美術史が通覧されるに留まらず、「慈愛に満ちた優しげな聖母」というイメージを介してビザンティン美術とルネサンス美術を架橋する研究となるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)
菅原裕文「聖母子像にともなう天使の役割」『エクフラシス』第1号(2011年3月)56-69頁(査読有)。

〔学会発表〕(計1件)
菅原裕文「安寧の形-コーラ修道院葬送礼拝堂におけるエレウサ型聖母子像」早稲田表象メディア論学会第2回研究発表会(於早稲田大学戸山キャンパス、2010年11月27日)(査読有)。

〔その他〕
ホームページ等
“Nova Makedonija”紙インタビュー(2011年4月4日、スコピエ)
<http://novamakedonija.com.mk/NewsDetail>

asp?vest=441191217&id=16&prilog=0&setIz
danie=22248

6. 研究組織

(1) 研究代表者

菅原 裕文 (SUGAWARA HIROFUMI)

早稲田大学・文学学術院・助手

研究者番号：40537875